

プ
ロ
ロ
ー
グ

「論争」は人々を惹きつける。特に、争点がきわめて明快であって、百家争鳴の状態にあるテーマほど面白い。政治論争でさえ、郵政問題を「抵抗勢力か否か」と単純化してせまれば国民は反応する。ましてやロマン溢れる考古学や古代史の論争は、時には関連ニュースが新聞のトップを飾ったとしても不思議ではない。

「邪馬台国はどこにあったか」。

このテーマひとつだけでも、数多くのアマチュアが人生を楽しませてもらっている。専門学者の多くが「大和説」なのに、アマチュア側では「九州説」が優勢で、国民投票をすれば「九州説」が勝つかも知れない。

関連して「三角縁神獣鏡は魏鏡か国産鏡か」も面白い。最近では、魏鏡説が多い専門家の中にあっても、「中国からは一枚でもない」という重い事実から国産説を唱える学者も増えている。その議論の帰趨によつては「邪馬台国論争」にも大きな影響を与えるが、ここでもプロ対アマの構図が見てとれる。

「弥生時代は五百年遡るのか」というテーマも興味尽きない。炭素十四法や年輪年代法など科学的な手法が描く世界は、はたして旧来学説を葬り去ることができるだろうか。考古学の定説とはそんなひ弱なものだったのか。

また、「古墳はどんなものさしで造られたか」という尺度問題も「ひとつの古墳にひとつの尺度」と揶揄されるほど百家争鳴の論争テーマである。そもそも、わが国の古代史分野では「法隆寺は再建か非再建か」の論争が最もエキサイティングであった。その際の主要な論点として、法隆寺が高麗尺で作られたという尺度論争があったので、その伝統を引き継いだのかも知れない。

その他にも、金属考古学の世界では、「弥生時代には製鉄が本当に行われなかったのか」とか「古代日本に間接製鉄法があったか」あるいははたして「古代日本では硫化銅の製錬が行われたか」などの論争が繰り広げられている。

考古学や古代史の世界では、論争の種は尽きることがない。

筆者は、四十年間、鉄鋼会社で生産管理や研究開発に携わってきたが、それと同時に、趣味として東アジアの古代史や考古学研究を続けてきた。今、韓国の国立慶尚大学で招聘教授として金属工学を教えながら、考古学等の研究をしているのも、間違いなくその延長線上のことである。

継続は力である。最近になって相次いで、永年の研究成果を学説として纏め上げ学術誌に発表した。ありがたいことに、その内容を新聞でも紹介してくれているので、ご存知の方もおいでだろう。実は、そのテーマの多くが、論争としての条件を兼ね備えた上記の三角縁神獸鏡問題、弥生時代遡上問題、古代尺度問題、あるいは金属考古学の諸問題と大きく関連している。要は、野

次馬的な好奇心に満ちていたのである。

このように、考古学や古代史の論争はまことに興味津々である。アマチュアの立場なら、想いを主張することだけでも充実感があり、同好者が賛同してくれば、それでも十分である。事実、アマチュアの多くの問題提起は、同人誌的な研究誌とかインターネット上に載せられ、専門家のレビューを必要とする学会誌に載ることは少ない。そればかりでない。最近では、専門家たちでさえ、学術論文としての発表よりも新聞発表が先行させている事例も多くある。

しかし筆者は理系の技術分野、学術分野で永く生活してきた。基礎データに基づかない主観的な推論は好まないし、学会誌のレビューを受ける前に、新聞発表する風習もルール違反だと思っている。だから、アマチュアであっても、これから述べることは全て学会誌あるいはそれに準ずる学術誌に載せたものである。

「理系の視点から」と副題をつけたのは、もちろん板倉聖宜氏の『日本史再発見』という良書を意識してのことである。基礎データに基づき、偏見を排除して、理系の立場から歴史を見直したら、そこには通説とは異なった世界が見えてきたと板倉氏はいう。理系らしい論理的な手続きに説得力がある。

また最近、藤原正彦氏はベストセラー『国家と品格』の中で、数学者としての観点から、「長い論理は危うい」「短い論理は深みに達しない」と述べている。筆者なりに三角縁神獣鏡に例を採つて言えば、「風が吹けば桶屋がもうかる」式の長い論理によって魏鏡であることを説明する議論がある一方で、「なぜ三角縁神獣鏡が中国から出土しないか」との問いかけに「特鑄説」で答え、その「特鑄説」の論拠はと問われて「中国から出土しないから」と答えるような短い論理もある。確かに、いずれも危うい。

理系の視点から言えば、これらの論理展開の問題点についても書いて見たい。しかし、不十分とは言え、既に問題指摘も多くあるので、それは筆者の役割とは言えないだろう。筆者の特徴はあくまでデータに基づく議論、それも数値データに基づく推論にあると自認している。現場操業データや実験データを見て、問題点を発見するのは、技術者、研究者の最も重要な能力であり、その点ではいささか自負しているものがあるからである。

したがって、筆者の主張は、主観的な思考を排し、基礎的な数値データに基づき展開したものである。すなわち、従来の論点とは全く異なる形での理系的なアプローチが多く、その結論は、従来の結論とは独立的な意味をもっている。

ここで、読者の便のために、これから本書で述べようと思っている内容について、その概要を

あらかじめまとめて紹介して置きたい。

三角縁神獸鏡問題

三角縁神獸鏡の製作地を特定するためには、鉛同位体比の比較が有効な手段である。三角縁神獸鏡の鉛が後漢鏡や魏晉鏡の鉛とどんな関係にあるか判れば研究は大きく前進するだろう。しかし、その簡単なことが未だ十分に検討されているとは言えないのである。すなわち、中国で出土した後漢鏡や魏晉鏡については、ただの一面も鉛同位体比の分析が行われておらず、分析値の知られているのはすべて日本で出土した「舶載鏡」ばかりなのである。

論理的問題であるが、「舶載鏡」の中には複製鏡が含まれており、三角縁神獸鏡と同様に、それらが全て中国で作られたという証拠は何もない。したがって、日本出土の後漢鏡や魏晉鏡の中から複製鏡等を除外しないことには、真の中国鏡の鉛同位体比は確定できない。そこでデータ解析技術の威力が発揮されることになる。

すなわち、後漢鏡や魏晉鏡については、中国での出土状態から、いつ頃流行したものが判っている。一方、「舶載鏡」の副葬時期も考古学的には判っている。したがって、中国での流行時期と日本での副葬時期の差が少ないほど真の中国鏡の可能性が高く、時期差が大きいほど複製鏡の

可能性が高いと考えて見るのが着眼点となる。

その結果は、時期差によって舶載鏡の鉛同位体比の分布が見事に二分され、その片方が日本製の仿製鏡や銅鍍と一致したのである。かくして、真の中国鏡の組成は引算として残りの組成と判明したが、問題の三角縁神獸鏡の組成は中国鏡とは全く一致せず、日本製の仿製鏡や銅鍍と一致した。

また、鑄造時に添加して使用する補助的な鉛に関する考察でも、朝鮮半島かあるいは日本産の鉛が使用されたことが判明した。

その他にも、鉛同位体比から見て、紀年鏡の中に、年号が異なるにも拘らず同一時に作られたとしか思えないほど類似した組成を持つグループがある反面、いわゆる同范鏡でも鉛同位体比が異なり、他所でつくられた可能性が高いものがあることを見出した。それらは複製鏡の証左となると考える。

以上の解析によって、結論的に言えば、三角縁神獸鏡は魏鏡ではあり得ない。

なお、平成十六年に、泉屋博古館がスプリング8の分析によって、「三角縁神獸鏡は魏鏡である」との結論を出したことがあるが、それは金属考古学の基礎を理解せずに展開した議論であり、前提条件に誤りがあり、結果は全く無意味である。この点についても関連して紹介したい。

弥生年代遡上問題

歴史民俗博物館の主導する炭素十四による弥生年代遡上論は、年代較正基準が地球上どこでも同じだとする前提条件によっている。しかしその前提自体に科学的な見地からも問題がある。例えば、歴博の主張に基づいて弥生中期の年代を設定し、歴博の炭素年代データと対比して見ても、九州の海岸地方のデータは較正基準から百年単位で古い側にシフトしている。これは海中の炭素十四が数百年古い時期を示すことと関係があり、海洋国日本においては(特に海岸においては)、無条件で国際較正基準を適用することはできないことを示している。

また、弥生青銅器の鉛同位体比の解析結果によると、初期の細形銅剣、多鈕細文鏡、菱環式銅鐸など朝鮮半島系と称される青銅器の鉛は、極めて特殊なもので、殷周以前の中国でのみ使用されていたものである。鉛産地としても中国の四川省・雲南省などしか知られていない。それが、五百年以上後の燕国や朝鮮半島、弥生前期末から中期初頭の日本に突然現れるのである。このような異常なことが起こったのは、燕国の楽毅将軍が斉国で奪ってきた祭器の再使用としか考えられない。

燕国の将軍・楽毅は、三晋や楚、秦と連衡し、昭王二十八年(紀元前二八四)に斉の臨淄を陥落させ、その際に斉の宝物祭器を根こそぎ奪って昭王のもとに送り届けたと『史記』は伝えている。

る。宝物や祭器などが殷周期の伝世青銅器で、それら青銅器に特殊な鉛含まれていたことは疑いない。そしてこれら略奪品が青銅器原料として燕や朝鮮半島、日本で再活用されたことも十分に有り得ることである。そうであるならば、弥生中期の始まりは紀元前二百五十年頃となり、歴博の主張する紀元前三百七十年頃とはまったく合わない。むしろ考古学界の旧説に近い。

したがって、歴博の主導する弥生年代の大幅遡上論は現状では成り立たない。

古代尺度問題

古墳がどのようなものさしで設計されたか。まことにロマンあるテーマで筆者が最も精力を注いできた研究である。しかし、「ひとつの古墳にひとつの尺度がある」と揶揄されるほどの百家争鳴の状態であり、古墳の計測値の解析研究からだけでは、とても解決し得ない問題でもある。

そこで筆者が採った方法は、遠回りになるが、朝鮮半島を含めた古代宮殿、寺院の尺度の研究であり、朝鮮半島の土地制度の研究である。実に長期にわたる研究となったが、その結果、ついに朝鮮半島と日本の古代土地計量制度が同一であったとの画期的な論証を得ることに結実した。

すなわち、膨大な遺跡計測資料と東アジアの文献資料から、古墳設計に使用された尺度が、朝鮮半島や日本の土地計測尺と同一であり、しかも法隆寺・法起寺や慶州の皇龍寺などの建築尺度

すなわち「古韓尺」であったことを実証した。これは、古代の朝鮮半島との交流を、尺度という「物証」で裏付けたものである。

しかも、これらの土地計量システムは中国周代の土地制度とも共通していることを『礼記』の記載記事との対比で突き止めた。すなわち、古代東アジアの土地計量制度は、全て同じルーツを持っていたと考えられるのである。新事実の発掘が期待薄な古代史分野にあつては、きわめてスケールの大きな理論となつたと自賛している。

金属考古学の諸問題

金属考古学は特殊な分野である。考古学関係者だけでは、技術的な把握が難しいので、金属専門家の助力を仰ぐことになるが、その場合でも判断が正しくできるとは限らない。一口に金属と言つても、分野は極めて多岐にわたり、問題ごとに適切に対応することなど困難だからである。ところが、世の常として、特定少数の専門家の私見が、いつの間にか解説書として出版され、定説化されて行く。

いったん定説化されると、それを否定するにはエネルギーが要る。よほど明快な反論でないと、見解の相違で終わつてしまい、相変わらず間違つた内容が定説として生き続ける。そのような事

例に「古代日本に間接製鉄法があったか」とか「硫化銅の製錬は行われたか」などの問題がある。

筆者は、金属の理論的な側面を援用しながら、これらの問題について、同じ考古学的なデータの上に立って、誤謬を指摘し否定してきた。その際に感じたことは、批判に晒されることのない理系研究者等の専門家の見解には、誤謬が放置されている場合が多いと言うことである。だから研究者が限定されている場合はその結論を妄信してはならないのである。

考古学や歴史学は人間の営みを対象としているため、政治、経済、社会、文化から理学、工学、医学、農業、漁業、繊維、土木建築などに至るまでほとんどの学問分野と密接に関連している。逆にいえば、あらゆる分野の研究者が考古学や歴史に参与できる可能性を持っており、現にトイレ考古学、地震考古学、天文考古学、年輪考古学、人骨考古学など意表をつく命名の分野が話題になっている。

しかし残念ながら、各分野の一般的な研究者は、歴史や考古学でどのようなことが話題になっているか、必ずしも知っているわけではない。その点で、考古学や歴史学において争点が明確化され、新聞等が取り上げることが意味のあることだと思っている。

これからの時代は、職業としての専門知識を、それだけでは終わらさずに、趣味の分野でも活かすことが一般的になってくるだろう。そんな時、歴史や考古学は絶好な分野である。筆者が、

本書を通して本当に伝えたいことも、実は論争に参加することの楽しさなのである。

本書は、ある意味で理屈っぽく硬い内容である。しかし、アマチュアの、いや人間本来の好奇心をいささかでも満足させようという趣旨のものでもある。もし、最後まで一緒に楽しんでいただけたら筆者の最も歓びとする所である。いや、拾い読みして頂けるだけでも、その歓びは変わらない。